

---

# ツキハミ虫

藤原建武

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツキハミ虫

### 【Nコード】

N9672W

### 【作者名】

藤原建武

### 【あらすじ】

「ヨルガクル」、謎の言葉を残して平戸省吾は死んだ。平戸に妻を殺された葛城恭次は、その言葉の意味を明らかにしようとする。

そこへフリージャーナリストの斑鳩郁雄が、月前町で起きる怪事件の謎を追って、恭次の前に現れる。

人口二万人の、山間にある月前町。水田や果樹園が広がっていた。恭次は日本農家同業者組合、略して「農同」の調査員だった。農家の家々を訪ね、肥料や農薬の具合を聞いたり、新しいものを紹介したりする。

秋の爽やかな日差しの中、恭次は縁側に腰かけ、老婆の出したお茶をすすっていた。

「どうですか、最近」

隣に座る老婆　大沢は金歯をのぞかせて笑いながら、

「虫もつかなくなつて、大助かりよ」

「それはよかつたです」

「ただね、最近鳥を見なくなったかしら」

「食べる虫がいなくなったからじゃないですか？」

「昔は庭木の枝に餌をさしてたら、よく来たんだけどね」

恭次は話半分に、通帳を確認する。

「実は今、新たに四十万以上の預金をしていただくと、農薬の値段を二割引くサービスをやつてるんですよ」

「あら、そうなの」

「今までどおりの年利ですし、いい話だと思つてんですけど」

「そうね。最近はガソリン代も高いし、息子夫婦も助かるでしょ」

「ありがとうございます」

農同では農家の資産管理、運用もしている。

「元銀行員ですし、信頼できるわ」

恭次は苦笑する。三年前まで、隣の銀行に勤めていた。二年ほどで、月前町の農同に転職した。給料や待遇から見れば、かなり見劣りする。

大沢はその事情を知っており　　というよりも知らない人間の方

が少ない　嘆息をもらす。

「三年前の“あのこと”さえなければねえ」

恭次の表情が引きつった。

「あら、ごめんなさいね。余計なことといって」

「いえ。妻のずっと暮らしてたこの町で、皆さんのお役に立てて、僕は満足しています」

それに大沢は、どう声をかけるべきか戸惑っているようだった。

恭次は立ち上がり、

「それでは失礼します。ごちそうさまでした」

大沢はしわしわの顔に笑顔を浮かべ、

「もしよかったら、孫娘の旦那に欲しいわ」

恭次は苦笑し、

「ありがとうございます。まだ独り身を楽しみたいので」

大沢家を出て、車に乗り込む。今日のうちに、あと五件。長話に付き合うのも仕事なので、訪ねるペースは遅い。

今の仕事もそんなに悪くなかった。

恭次は三年前、挙式の直前に、妻を殺された。犯人は精神鑑定の結果、「責任能力が無い」と無罪になった。その落胆の中、精神病院の施設で、犯人は変死した。衰弱死とも、自殺ともいわれている。ただ犯人は発作を起こすたびに、「ヨルガクル」と叫んでいたらしい。

夜が来る　だが夜に怯えていたわけではない。昼夜かまわず、発作のたびにそう叫んでいた。

恭次は何度か、その言葉の意味を考えたが、見当もつかなかった。ただその言葉に、妻が殺されなければならなかった、理由を求めたかった。

犯人は妻と同じ、月前町の人間。何か知っている者はいないかと、農同の調査員になり、月前町の人々と親密な関係を築くようになって

た。

三年目にしてやっと分かったことは、犯人の平戸省吾が、奥月村の人間だということだった。

「奥月村は、今は誰も住んでいないが、あそこの連中には、たまに頭のおかしいのが産まれるんだ」

そう老爺は話した。奥月村は二十年前、月前町に合併された。老人世代の間では、奥月村に関する、奇妙な言い伝えがあった。

「近親結婚を繰り返した結果か、頭に問題をもった連中が多いんだ。ただ見た目や、普段の様子からじゃ分からない。急に暴れ出したり、意味の分からないことを叫び出すらしい。最後は自殺するか、人を殺したりするらしい。俺は見たことないがな」

その言い伝えから、奥月村の人間というだけで、忌避の対象となった。しかし戦後の混迷期などに、出稼ぎにきた村人との混血が多く産まれた。誰が村の血筋が分からなくなり、取り立てて話題にする者もいなくなった。

「平戸が奥月村の人間の、子孫だつていう証拠はない。だが素行を聞く限りじゃ、村の人間の気がするんだよな」

「素行、ですか？」

「嫌なことを思い出させて悪いが、事件を起こす直前、ヨルガクル、そう喚いて、暴れていたらしい。まるで何かに怯えるように」

「夜が来る……」

「それが夜のことだとしても、真つ昼間からだ。今じゃ平戸家もどこかに引越して、本当のところを確かめようもないが。一日中、物置から出てこなかったとか、そんな噂を聞いた」

「奥月村の人間は、みんなそうなんですか？」

「全員ではないが、それと同じようなことを、五年前の一家心中事件の犯人も口走っていたらしい」

疑念は確信に変わった。「ヨルガクル」、その不明な言葉に、何らかの意味がある。

地主である父には、真実を知ってどうするつもりかと聞かれたが、

恭次は真相を明らかにすることで、前に向かおうとした。このまま彼女の死を、曖昧にしたいくない。

自己満足でしかないが、そうすることで、気持ちの決着がつく気がした。

斑鳩郁雄はフリージャーナリストの肩書きで、奇怪な事件の謎を追っていた。ジャーナリズムの世界では異端扱いで、その記事を書てくれる奇特な雑誌は一つしかなかった。

かろうじてフリーを名乗れるのは、ときおりその手の依頼が舞い込むからだ。

昨今のテレビは、幽霊や未確認生命体の特番が盛んだ。そこで斑鳩に、その下調べや、番組作りの打診がくる。ネームプレートに「フリージャーナリスト」と書かれ、コメンテーターとしてテレビに出演したこともあった。仕事は順調といえた。

その斑鳩にコンタクトを取ってきた人物がいた。素性は一切明らかでなく、なにか危険な臭いがした。普通なら無視するところだが、その人物から送られた資料に興味を抱いたのと、その人物に興味を持っていたからだ。

待ち合わせ場所は喫茶店だった。やって来た、口髭を生やし、やや三白眼の男は、「佐藤」と名乗った。歳は三十代前半か。日本人と思われるが、長身で彫りが深く、アラブ系の面差しがあった。国籍までもが不明である。

斑鳩はそれほど背は高くないが、長髪にサングラス、野球帽をかぶっていた。三十路前で、細身。この格好でギターでも持てば、ミュージシャンぽく見える、とよくいわれる。

「最初は音楽家と思いましたよ」

佐藤は表情一つ変えずにいう。

「さっそくですが本題に入りましょう。この資料に書かれたことは真実なんですか？」

「はい」

「私は職業柄、幽霊なども調査しますが、いわゆる怨霊などは信じ

ていません。ですが短期間のうちに、二人の人間が、限定された空間で、同様に命を落としたのは事実。しかしそれを、“呪い”と断定することはできません」

「やはり貴方は、私の思ったとおりの人物だ。さすがです。そのとおり、我々は呪いだとは思っていません」

「では？」

「分かりません。五年前、月前町で起きた一家心中事件。正確には父親による一家惨殺。最後は家屋が全焼しています」

「その後、父親は押し入れの中で、膝を抱えた状態で、焼死しているのが発見されたんですね」

「このとき、騒ぎを聞きつけた近隣の住民が、興味深い証言をしています」

「ヤミガキタ」

「そうです」

そこで斑鳩は腕組みした。「ヤミガキタ」、字をあてれば「闇が来た」だろう。しかしそれだけ聞けば、何かの幻覚を見ていたのか思えない。

「それは、精神が錯乱してただけじゃないんですか？」

「確かに錯乱していたのでしよう。しかしその二年後に起きた花嫁殺人事件。犯人の平戸は精神鑑定の結果、無罪となり、施設へ収容されましたが、間もなく変死しました」

「そして言い残したのが、ヨルガクル」

「そうです。“先生”はこのことをどう思いますか？」

「うん。おそらく二人とも、闇や夜のことをいつてるのではなく、共通するイメージ、たとえば何か黒いものとか、それに迫られる幻覚を見ていたのだろう」

佐藤は指を鳴らした。

「そのとおり！ しかしそれは何なのか」

「それが呪いだというわけですか？」

「そう考えるしかないのです。この二人は面識がない。ただ」

「同じ、奥月村の子孫」

「そこに鍵があると思っっています」

佐藤はブラックコーヒーを口に運び、格調高く目を閉じる。そして一息おき、

「先生には、この謎を明らかにして欲しいのです」

「依頼とあれば、全力で調査しましょう。しかし何のために？」

「先生ならお分かりでしょう？」

斑鳩は笑う。

「もしこれが、奥月村の子孫の呪いなら、また同じことが起こる。

そしてその子孫がどれだけいるか分からない。もしも一斉に発作を起こしたら、どれだけの規模の混乱が起こるか分からない。ということではないですか？ 佐藤氏」

佐藤は指を鳴らす。

「先生には頭が上がりません。調査の仕方はすべて、先生にお任せします」

「必ず真相を明らかにしましょう」

佐藤は封筒を取り出し、当座の調査費用を渡す。厚みで、百万円以上あることが分かった。斑鳩への厚い信頼が分かる。斑鳩は力強く笑った。

「最後に一つ、分からないことがあります」

「何でしょう？」

「貴方の正体です」

それに佐藤は、口髭の下で笑った。

「それは是非、先生の力で明らかにしてください」

奥月村は二十年前、月前町に合併された。平安時代の記録によれば、もとは一つの郷里だったらしい。古くは月波見郷といった。その後、江戸時代の記録には奥月と月前の名前が出てくるので、その以前に二つに分かれたらしい。

斑鳩は月前町の役場で、奥月地区には誰も住んでいないことを確認する。奥月村の資料は役場に移されていたが、古い文献は県の財団が保管しているらしい。閲覧を申請し、後日にアポイントメントを取った。

「それ以外に、古い資料を保管してある場所はないでしょうか？」  
斑鳩は、文献の調査にきた、研究員を名乗った。名刺には「歴史学調査員」などと、曖昧な肩書きをのせてある。ただ学芸員の資格を持っているので、そこらへんを怪しまれても問題ない。

役場の受付の、中年男性は、

「お寺さんなら、何かあるんじゃないですかね？」

月前町の檀家寺、光鐘寺。開創は江戸時代の寛永期。江戸幕府が寺請制度を完成させた頃だ。

斑鳩は町の中に、ひっそりと佇む寺院を目指した。禅寺で、座禅体験ができる。せつかなので斑鳩は、小一時間座禅させてもらった。その後、住職に、

「お寺の縁起を教えてくださいなのですが」  
歳のいった老僧は、穏やかに話しはじめた。

奥月村には人の心を惑わす、「鬼虫」という魔物が住んでおり、それを清賢和尚が退治し、光鐘寺を建てた。

「その名残として、一風変わった“鬼やらい”の儀式が伝わっています。おそらく当時の芸能、歌舞伎や能楽と混ざったのでしょう。

“モノツキ”と呼ばれる鬼役を、“モノオトシ”と呼ばれる僧役が

退治する演劇です」

モノツキとは、憑依された者のことを意味するのだろう。モノオトシは、それを“おとす”者。

「その鬼虫というのは、どのような鬼なんでしょう？」

「おそらく、仏法の説話から引いてきたのでしょうか。鬼虫とは人の心に住む、邪悪だとされます」

暗に「物語の域を出ない」と言っているのだ。

「モノツキとは、どのような状態をいうのでしょうか」

「狐憑きの類でしょう。人を疑心暗鬼にさせ、豹変させる、悪霊のようなものです」

「なにか当時を伝える、文献などはないのでしょうか？」

「あいにく、明治の廃仏毀釈によって、寺は焼け落ちてしまい、多くの貴重な文献が失われてしまいました。ただ、その後に描かれたものなんです」

住職は巻物を持ってくる。

「その鬼虫を描いたものです」

それはたくさんの子蜘蛛を抱えた、巨大な蜘蛛の絵だった。おどろおどろしく描かれ、西日本に伝わる妖怪、牛鬼に似た印象を抱いた。描かれたにしても、かなり最近のものではないだろうか。

斑鳩が寺を後にした頃、晩鐘が鳴った。腹に低く染みこむ。

佐藤の話ではないが、“呪い”の説話は長く根付いているようだ。

## Report 03 「ウェンディ」

恭次は二十七歳。妻とは二つ違い。

妻 氷上晶子と出会ったのは偶然だった。車が側溝にはまり、困っている彼女を拾い、家まで送った。その間に意気投合し、都合を見つけては会うようになった。

一年ほど交際し、一緒に住むようになった。晶子はよく弟の自慢をした。その弟の描いた絵が、町の美術館で、大賞を受賞したらしい。

暇を見つけて行こうとした矢先だった。「斑鳩郁雄」という記者から、話を聞きたいと持ちかけられた。どこで調べたのか、電話口で、

「つらいことを思い出させると思いますが、三年前のことで、お聞きしたいことがあるんです」

恭次は、この斑鳩とかいう記者が、自分の知らないことを、知っているかもしれないと期待した。

「大丈夫です。どこでお会いしましょう?」

「実は今、月前町に来ているんです。駅前の喫茶店でよろしいですか?」

「それをお願いします」

そうして実際に、斑鳩に会った。長髪に野球帽、サングラスと不審な出で立ちだった。背は恭次よりも低いだろうか。歳も若い気がした。

「どうも、こんにちは。斑鳩です」

「はじめまして」

挨拶もそうそうに、

「葛城さんは隣の銀行に勤めていましたよね?」

「ええ。妻の住んでいた町が恋しくて、転職しました」

「失礼。軽率な物言いでは不快にしたら申し訳ないのですが。葛城さんは、事件の真相を知るために、月前町に来たのではないですか？」  
恭次の顔が引きつる。

「そうですね。それもあります」

「私は今、この町で起きている、異常な事件について調べているんですよ。五年前に起きた、一家心中事件はご存じですか？」

「はい」

そこで恭次は、斑鳩に期待を寄せるようになった。

「犯人は、“ヤミガキタ”と繰り返していたそうです。そして三年前、葛城さんの奥さん、晶子さんが亡くなられた事件で、犯人の平戸は“ヨルガクル”と言いながら、変死した」

「そうです。そしてその二人とも、奥月村という、二十年前に合併された村の人間だそうです」

「やはり調べていましたか。農同に勤めていますから、なにか詳しく知っているのではと思っただんですよ」

「でも、三年かけて分かったのはそのぐらいです。言葉の意味も分かりません。偶然二人とも、似たような幻覚を見たんじゃないでしょうか」

自分で言っただけで、違ふなと思った。そんな単純でない、何かを感じていた。

斑鳩は口元に手をあて、

「幻覚、といますと？」

「なにか暗いイメージ、それに迫られる幻覚、じゃないでしょうか？」

「ウエンディゴ、という精神病をご存じですか？」

「いいえ」

「これは北部のインディアンに伝わる伝承なのですが。ウエンディゴ自体は悪さをする精霊のことです。問題は、これに取り憑かれた人間です」

「取り憑く、という」と

「日本でいえば狐憑きのようなものかもしれませんが。風土病、あるいは民俗宗教による特有の精神病なのかもしれません。このウエンディゴに取り憑かれた者は、自分がウエンディゴに変身するという、恐怖感に支配されます。そのうち通常の食事をできなくなり、かわりに人間が、食べ物に見えてくるそうです。そして最後には、完全にウエンディゴになる前に自殺するか、人を殺害し、部族の者に処刑されるそうです」

「それと、今回の件が？」

「ウエンディゴ憑きが、一種の精神病だとしたら、たとえば栄養分の不足による幻覚だとしたら、その状況はすべての人種に起こりうるものです。ウエンディゴの場合は、そのイメージが伝承に結びつき、そうなった。今回のそれが、私は“ムシツキ”と呼んでいるのですが、もしそうだとしたら、ウエンディゴが暗いイメージに置き換わっただけなのではないでしょうか」

「そう考えれば、そうなのかもしれませんが……」

にわかには信じられなかった。もし何らかの栄養不足に起因するのなら、もっと起きてもいいのではないだろうか。

「実はこのムシツキは、古くは江戸時代から伝わっているのです。人の心を惑わす、鬼の虫として伝えられています」

「そんな話が……」

「光鐘寺に伝わるものです。あまり知られていないのでしょうか。そして鬼虫は、奥月村に住んでいたとされます。奥月村の人間特有の、何らかの精神病なのでしょう」

「まだ私は、斑鳩さんの話は信じられませんが、だとしてどうするんです？ 記事にするつもりですか？」

なにかもてあそばれている不快感を覚えた。それは急に現れた人物が、恭次の三年間の努力を無駄だと言わんばかりに、その真相を語っているからだった。

「私はただ、真実を明らかにしたいだけです。これはまだ仮説にすぎない。この話を警察や医療機関にしても、相手にされないでしょ

う。私は、ただ曖昧に、この事件を闇に葬りたくないのです」

斑鳩から熱意が伝わってきた。確かにこんな話を記事にしても、誰も相手にしないだろう。功名心ではなく、彼のジャーナリズムがそうさせるのだ。

「ですが、どうやって真実を明らかにするんですか？」

「奥月村の人間に接触し、彼らのイメージの根底にあるものを探り出すんです。しかしそのためには信頼が不可欠。民俗学の調査は、一夕にしてなりません。地道な踏破と、互いの信頼関係が不可欠です」

「民俗学の方なんですか？」

「いえ。私は、サイエンスエンターテイナーです」

斑鳩の話は、それにあたって恭次に協力して欲しいとのことだった。恭次は快諾した。自分のやるうとしていたことと同じであり、力強い味方ができた気がしたからだ。斑鳩なら、真実を明らかにしてくれる気がした。そしてそのために、自分の存在が不可欠だ。たとえ真実を明らかにしても、もう妻はいない。それでも、前に進むため、今自分が生きる気力は、この町にある謎に迫ることだった。

「そういえば、このあと予定があるんじゃないですか？」

「ああ」

斑鳩の言葉に思い出す。

「たいした用事じゃないんです。美術館に行こうと思っていました。斑鳩の話がたいしたことがなかったら、適当に切り上げて行くつもりだった。そんなふうに使っていたことが申し訳ない。

斑鳩は感心したように、

「ほう、絵がお好きなんですか」

「いえ。実は妻の弟が、描いた絵が入選したんですよ。なんか大賞をとったらいいんです」

「見に行かなくていいんですか？」

「いや、申し訳ないのですが、斑鳩さんの話が一段落したらのもりだったんです。でも、今はそれどころじゃない、と思ひまして」「せっかくなので、一緒に行きましょう。道すがら話すこともできますし」

「いえ、さすがに悪いです」

「お気になさらず。私はこれでも、絵が好きなんですよ。レオナルド・ダ・ヴィンチとか」

「では、申し訳ありませんが」

今日知り合った人物と、弟の絵を見に行くのは奇妙な気分だった。

しかしいろんな人に、妻の弟の絵を見てもらえて嬉しかった。

斑鳩は恭次の車に乗り、美術館に向かう。道中、今後の計画を立てた。斑鳩は町の民宿に泊まっているらしく、しばらく滞在するらしい。恭次は一人暮らしなので、居候をすすめたが、それには及ばないと斑鳩は断った。まだそれほど親しくないのに、それ以上は引きとめなかった。

「私は今度、奥月村の跡地を見てきます。葛城さんは、もし機会があれば、情報を引き出してください」

「分かりました」

とはいったものの、具体的にどうすればいいか、思いつかなかった。

そうこうしているうちに、美術館に着いた。休日だが、客は少なかった。

「ほう、モネの巡回展が来てるんですか」

「みたいです」

入り口の看板に、貼り紙があった。斑鳩が興味を示したが、恭次は構わず、町民の作品が展示されているコーナーに向かう。曲がり道だらけの空間に整然と、百点近い作品が展示されていた。

絵が好きな妻がいればまた違ったのだろうが、恭次は絵の良し悪しは分からないが、どれも素晴らしい作品に見えた。斑鳩は胡散臭い講評をつけている。そして弟 氷上霧也の、作品を見つける。

人間の背丈ぐらいいはあるのかという、縦長のキャンバスに、力強い油絵が描かれていた。それを見て斑鳩もうなる。

「縦断するように描かれたこの人物は、うん、そうだな、確かな存在感があるのに、まるで生命がないかのようだ」

「ですね」

とうなずくしかなかった。白いドレスを着た女性、だろうか。まるで人魚のような佇まい。その美しい顔に見覚えがあったが、かすんだように描かれ、まるで幻のように感じられた。

「これは大作だな。周りを囲んでいるのは花だろうか？ 黒い斑点

に隠されて、まるで虫食いの眼鏡でのぞいているようだ。タイトルは「

「はんしょく」です」

涼やかな声に、斑鳩と恭次は振り返った。そこには微笑を浮かべた、少年がいた。

「霧也くん！」

氷上霧也は、どこか厭世的な笑みを浮かべていた。

「どうしたんだい？ 出歩いてても大丈夫なのかい？」

「ええ。おかげさまで。葛城さんもどうしたんです？」

「君の絵を見に来たんだよ」

「ありがとうございます。そちらの方は？」

どう紹介しようかと思った。斑鳩は晶子の死について調べている。斑鳩にしても、無遠慮に質問しかねない。

そんな不安をよそに、斑鳩は答えず、

「この絵は、何をテーマにしたんだい？」

「さあ、何でしょうかね」

霧也は肩をすくめてみせる。どこか意地の悪い性格をしていた。

斑鳩は思案顔で、

「黒い斑点、“斑蝥”、斑に食いつぶされているのは花だ。これは自然が蝕まれていくさまと、そうして失われていく女神、あるいは何らかの象徴を描いたものじゃないかな」

霧也が驚いたように目を見開く。

「美術関係の方ですか？」

「いや、フリーの記者だよ。葛城さんとは知り合いでね、美術館に行くというからついてきたんだ」

「そうなんですか」

斑鳩は遠慮したのか、恭次と同じように、霧也には聞かなかつた。

霧也はまた、あの笑みを浮かべると、

「自然が芸術を模倣するという、言葉を聞いたことありますか？」

「オスカー・ワイルドだね」

「まあ僕は、誰が言ったのかしらないんですが」

自嘲気味な表情をして、視線を「斑蝕」に向ける。

「もしも自然が芸術を模倣するのなら、人の罪もまた、模倣するのではないでしょうか」

「というと？」

「奪われたように、奪う」

その言葉が、恭次の心臓を刺した気がした。霧也もまた、三年間苦しんだ。それは自分以上だったかもしれない。そして前に進むために、この絵を描いた。だがこの絵の、奪った者と、奪われる者はどこにあるのだろう。

「では僕は、モネの展示を見に来ただけなので、これで帰ります」

「うん。じゃあ、また。気をつけて」

「はい」

霧也は一礼して去っていく。恭次は霧也が、無理に笑っていることに気づいた。自分が目の前にいるだけで、あのことを思い出してしまうのではないだろうか。

恭次が霧也の背中が、曲がり角に消えるのを見守っていると、

「霧也くん、どこか具合が悪いんですか？」

しばしば恭次が気にかけていたのが分かったのだろう。

「実は霧也くん、事件のショックで、一時期失明していたんです」

「そうだったんですか」

「徐々に良くなって、今ではああして、一人で出歩けるようになったみたいです」

「逆境が、彼を成長させたんでしょう。この作品は素晴らしい」

恭次は再び「斑蝕」を見た。この女性像が晶子なら、奪われた者は彼女のことなのだろう。

奥月村の人間といっても、噂程度にしか知らない。もしかしたら無関係な人間の可能性もある。戸籍謄本で確認しようものなら、二万人分の家庭を調べなければならぬ。写しを取るにしても、数百万円はする。斑鳩ならすでにやっていそのだが。

住民票などは、ある程度の手続きを踏めば簡単に見られる。それがもとなる犯罪も起きているので、あまり気分のいいものではない。

そこらへん鑑みれば、恭次による三年間の信頼関係や人脈は、かなり有効だ。それが役に立つのも、斑鳩あつてのもの。斑鳩にしても、恭次の存在は不可欠。

使命感と真実に迫る期待に、恭次は胸を張った。

恭次が最初に足を運んだのは、高野家だった。ビニールハウスの果樹園をやっており、農同からは、スプレータイプの殺虫剤を購入していた。

「こんにちは」

恭次が挨拶すると、気さくな老婆が現れる。

「おや、恭次さん」

「どうです、作柄は」

「今年の桃は、なかなかだよ」

恭次は慣れた調子であがり、客間に案内される。老爺がここにこしながら待っていた。そこで恭次は胸が痛くなった。去年の春から孫娘が行方不明になっていた。この老爺が奥月村の人間だと聞いたが、気丈に振る舞っている姿に、どうにも聞くのが躊躇われた。

「今日は収穫の話できました」

「今年はぎょうさん取れたからね。単価は安くなっちまうだろう」「そうですね」

老爺が遠い目をする。

「瑞希はうちで取れる桃が大好きでな。ビニールハウスだから年中取れるし、飽きもせずよく食ってたもんだよ。たくさん余るだろうし、今年のは特に美味いから、食わせてやりたいな……」

「きつと、無事ですすよ」

老爺は苦笑する。

「去年の春だったかな。絵を描きに行くって言って、出て行ったきりだ。山狩りまでしたんだがな」

「絵が、好きだったんですか？」

「学校の課題だったかな？ いや、高校に上がる時だったから、そんなことはない。誰かと描きに行くって言ってたかな」

「そうだったんですか……」

恭次は言葉に詰まった。どうにも斑鳩の期待には応えられそうにない。

不意に老爺が、

「奥月の人間にはな、奇妙な病気があるんだよ」

「えっ？」

「ああ。今は合併されて、最後の連中ももうこの世にいない。恭次さんは隣町の人間だったな。知らなくても無理ないな」

「いえ」

「そういえば」

そこで老爺は口を閉じた。平戸のことを思い出したのかもしれない。恭次は話を終わらせないうえ、

「その、奇妙な病気とは？」

老爺はどこか気まずそうだった。

「ああ。実は俺は奥月の生まれでな、出稼ぎに来た時、ばあさんと結婚したんだ。その奥月の人間には、たまに奇妙な病気の奴が産まれるんだ。ただ誰がそうなのかは、見た目からじゃ分からない。急にだ。気がふれちゃうんだ。クライとか、ミエナイとかわめいて。目が見えなくなっちゃうんだ。そしてそのうち……」

老爺はそれ以上話す気はないらしかった。そこから、

「だから瑞希も、急に目が見えなくなつて、谷底に落ちちまつたのかも知れない……」

「そんな」

「いや、悪い。こんなこと、町の人間には話せなくてな。昔は村の人間つただけで、ずいぶん嫌われたもんだ。恭次さんは町の間人じゃないし、なんとなく話したくなつたんだ」

「いえ。私でお力になれるのなら」

「ありがとうな」

斑鳩はそれを、ムシツキと呼んでいた。もう少し深く触れたかったが、これ以上は躊躇われる。ただ確かに、その奇病は存在するらしい。

その後、めぼしい情報を手に入れることはできなかった。留守録に、斑鳩からのメッセージがあった。恭次は折り返しかける。

「ムシツキについて、分かったことがあります」

「こちら興味深いデータを見つけました」

恭次は電話口で簡略に伝えた。ムシツキの初期症状、そして確かに奥月村の人々の間に伝わること。

そして後日、会う約束をし、電話を切った。

斑鳩は町の中でも、古い名家を訪ねた。

「来栖家」 明治以降、奥月村を一带に、大地主となる。そのことから奥月村との関係が察せられる。古い言い伝えや、文献が残っているかもしれない。

戦後に没落し、多くの土地が売り払ったらしいが、まだいくつか山を所有している。最近はゴルフ場の建設を誘致し、羽振りがいいらしい。

斑鳩は立派な門構えを前にした。「歴史学者」を名乗って、古い文献を見せてもらえるよう頼んだ。先方は快諾し、約束を取りつけた。

「立派な屋敷ですね」

斑鳩は屋敷の回廊から庭を眺めながら、応接間に案内された。

それに来栖の夫人は、控え目に笑う。

「昔は奥月村に、大きな庭園を持っていたんですよ。本当はこちらは別宅だったんです」

「ほう」

これで別宅だというのだから。来栖家には来栖の父母、来栖と夫人に息子達の、六人が住んでいる。住み込みの家政婦や庭師を含め

れば、十人以上になる。

来栖は留守らしく、来栖の父、七十歳にしては背筋は真っ直ぐで、鋭気に溢れていた。来栖老人は、頑固そうな表情で、巻物の類をテーブルに置く。

「蔵には、もつと家伝の文書があるんだが、あいにく入れなくてな。これは戦中に書き写されたものだ。来栖家の家系図になっている」「拝見させていただきませう」

来栖家の先祖、それも平安期から書き綴られていた。五十代以上になるのではないだろうか。来栖老人は鼻で笑い、

「まあ眉唾物だがな。最初の代は、奥月村の神主となっている。来栖家は明治まで、月波見神社の神主だった」

「ほう」  
いきなり当たりくじを引いた思いだった。

「明治以降は地主となったが、戦後に農地改革で、多くの土地を失った。今は没落して久しい」

「なにか、奥月村に関する伝承とか、ご存じないですか？」  
来栖老人は苦い顔をした。

「さあな。俺が奥月村で暮らしたのは、ガキの頃だ」  
「お寺さんで聞いたんですが、変わった祭りがあつたみたいですね」  
「あれは坊主どもが、自分らのありがたみを主張するためにつくった話だ」

「そうなんですか」  
「科学も何も無い、未開の時代だ。来栖家にも、迷信じみた伝承と文献が伝わっている。“モノツキ”だとか“ムシガミ”とか、くだらない」

「ムシガミ？ 鬼虫のことですか？」  
来栖老人はため息をもらす。

「常世の虫、という名前を知っているか？」  
「はい。聖徳太子の時代ですね。日本書紀に載っていたかと」

「ああ。この虫を祀れば、富と長寿が約束される。蚕の一種だった

のかもしれない」

「それがムシガミと？」

「そんな眉唾なものだろうということだ。庚申待は？」

「三戸の虫ですね。人の頭と腹と足に住み、その人が悪事をするのを監視している。そして庚申の日になると、閻魔のもとへ報告に行き、それによって地獄に落とされるといふ」

「ムシガミはそれに近い。実態はない。悪事を犯した者に取り憑き、その者の、目を食らうとされている。虫食む、その音が転じてか、ムシガミだ。最後にはその目から、一切の光を奪いさる」

「来栖家は、それを祀っていたわけですか？」

「そうらしい。もつとも、単なる迷信だ。光鐘寺にしても、それを巧みに利用したにすぎない」

来栖老人は、どこか自分に言い聞かせているようだ。それが奥月村の人間特有の病気なら、恥ずべきことなのだろう。

「その、取り憑かれた者は、どうするんですか？」

「光鐘寺の伝承にもあっただろう？ “オトス” んだよ」

「つまり」

「殺す、ということだ」

## Report 07 「殺人件数」

月波見神社と光鐘寺の儀式で決定的に違うのは、来栖家がムシガミを祀るのに対し、清賢和尚は退治した。どちらもムシガミ憑きを殺すに変わりはないが、光鐘寺はそれを魔物とし、多くの人々に受け入れられたのだろうか。また江戸幕府の、寺請制度の追い風を受けて、寺の勢力が神社側に勝ったのだろう。奥月村は月前村の下に位置づけられた。

斑鳩は来栖家で聞いた話を恭次にした。恭次もその間、

「五人ほど、奥月村の元住人から、高野さんと同じ話を聞きました。やはり奥月村の人間には、特有の精神病があるんでしょう。これで解決ですね」

「うーん」

斑鳩はうなづいた。

「釈然としないんですか？」

それに斑鳩は一人言のようにいう。

「年間の、殺人の認知件数は、1300人前後を推移している。殺人を数字で考えるのは危険だが、月前町の人口は2万人。殺人事件に巻き込まれる確率を、十万分の一とすると、五年に一度、起きるかどうかだ。行方不明者の数も含めればまた変わってくるのだろうが、それでも、数に偏りがあるにしても、ここ十年、必ず二人以上の被害者が出ている。行方不明者の数も、増減はあるが、十人を前後している。何よりも十年前を境に、その数字が上がり、安定していることだ」

「けっこう異常な数じゃないですか？ どうして問題にならないんです？」

「行方不明者に関しては、ほとんど一般家出人として扱われている。これは捜査本部が設置されない。殺人事件に関しても、中には不審

死で処理されているものもある。殺人事件が多発しても、警察の捜査能力が追いついていないのが実状だ」

斑鳩は沈思する。恭次は素朴な疑問をぶつけた。

「その十年間の殺人事件で、逮捕者は出ているんですか？」

「出ていることは出ているが、それは二人の固定数を上回った時。

そうすると一連の、連続殺人犯がいると考えるべき。しかし検視も行われていないものもあり、その結果も公表されていない。メデアも、農村の一角に興味を示さない。何よりも町民が無自覚だ」

恭次は斑鳩が、何を問題にしているのか分かった。

「もし一連の殺人事件を起こした犯人がいるのなら、それは“ムシツキ”、その精神病にかかっているか？」

斑鳩は指を鳴らす。

「そうですね！ もしその犯人を特定できたら、“ムシツキ”の病を証明でき、解明することができます！」

そこまで盛り上がって、急に沈む。

「ただ犯人につながるものは何も無い。そうすると、証明する手立てがない。手詰まりです」

「行方不明者の中に、その被害者がいる可能性は？」

「大いにあります」

「だとしたら、高野瑞希が失踪した時、一緒にいた人物が、何か知っているか、あるいは“ムシツキ”なんじゃないでしょうか？」

「それだ！」

斑鳩は今にも立ち上がらんばかりの勢いだった。そこでまた沈みかけ、

「しかし聞き込みとなると、たとえ目撃証言を手に入れても、特定するのは困難。正確な情報が手に入るかも心もとない」

「それなんです、心当たりがあるんですよ」

「本当ですか！？」

サングラスの奥で、斑鳩の目が光った。

「確か高野瑞希は、霧也くんの同級生で、同じ高校に進学したはず

でした。瑞希ちゃんは友人と遊びに行くと言って行方不明になりました。そうすると親しい間柄。交友関係を聞いて、絞り込むことができるかもしれせん」

あるいは高野瑞希が発症した可能性もある。高野老夫婦のためにも、瑞希を見つけたかった。

霧也の性格からして、そこまで親しかったかは分からないが、可能性を信じた。

恭次は氷上家を訪れた。父母は暖かく迎えてくれた。すっかり元気をなくした祖父に挨拶し、焼香する。そしてそのまま霧也の部屋に向かう。部屋の前から、油の臭いが立ちこめていた。

「僕だ。入っていいかい？」

少しの沈黙の後、

「どうぞ」

無感情な霧也の声がした。

恭次はドアを開く。むっとする、油の臭いにむせた。

「ちゃんと換気しているのかい？」

「窓は開けてありますよ。ただ風の通りが悪いんです」

金色の黄昏の中、霧也は逆光を背にしていた。部屋の中には、立てかけられたカンバスが乱立している。

霧也は絵筆をエプロンに差し、パレットを机に置く。ちょうど絵を描いている最中だったようだ。

「悪いね、邪魔して」

「いえ」

そうはいうが、どこか不機嫌そうだった。もっとも、霧也が機嫌のいいところを、見た覚えがない。

「それでどうしたんです？」

「少し聞きたいことがあってね」

恭次は適当に腰かけた。そうすると、霧也は真っ黒な影になった。微かな輪郭が、反射に浮かぶ。

「高野瑞希、という子を知ってるかい？」

「ええ。同級生でした」

「その高野さんが行方不明なのは」

「当然知ってます」

霧也は怪訝そうな表情を浮かべた、気がした。

「君は彼女と親しかったかい？」

「特別は親しくないです」

「じゃあ、彼女の交友関係は？」

「そんなには」

「そうか……」

恭次は当てが外れたと、思案した。そのわずかの間に、

「用が済んだなら帰ってもらえますか？」

ぞんざいに言う。それに恭次は戸惑った。

「ああ、すまない。あと一つだけ。彼女が去年の春、一緒に出かけた人物に心当たりは？」

「何をしに、ですか？」

「確か、絵を描きに行くとか……」

霧也の影が、笑ったような気がした。

「ああ、それなら、一緒にいたのは僕ですよ」

「えっ？」

「山に、一緒に絵を描きに行っただんです。彼女に誘われて」

「じゃあその時、何があったのか、君は知っているのか？」

「何がって？」

「彼女が行方不明になった原因だ。彼女はその日以来、失踪したんだ」

霧也は肩をすくめた。

「さあ」

「重要なことなんだ。君はいつまで、彼女と一緒にいて、いつかわれたんだ？」

「……」

霧也のかしげた横顔が、夕日を受けて光った。その瞳には、一切の色彩がなかった。言葉に詰まる霧也。そこで恭次は、漠然とした不安が込み上げた。いくつかの言葉が浮上する。「斑蝕」、失明、ムシツキ、ヨルガクル。

だが霧也は奥月村の人間だったか。晶子は、どうだったか分からない。氷上の人間は、奥月の人間なのだろうか。

瑞希が発症した可能性がある。霧也はそれに、恐怖を感じた。だが発症が、どのような状態で、期間なのか分からない。瑞希に、先に異変があったのか。

聞くことはたくさんあった。その一つ一つを確かめようとした時、霧也は確かに笑った。亀裂のように、影が裂ける。

「ずっと一緒にいましたよ。絵を描いている間」

「じゃあ、その後は？」

霧也は答えず、

「ヨルガクル、という感覚、分かります？」

恭次は息を呑んだ。

「まるで虫食いのように、ぽつんぽつんと、視界が黒くなっていくんです」

それは斑鳩から聞いた、ムシガミ憑きの症状だった。

「そのうち、目の前は真っ暗になるんですよ。ああこれが、夜が来た、ってということなんだなって」

霧也は笑っていた。恭次の表情が、よく見えるからだろう。今自分はどうな顔をしているのか。無表情かもしれない。やはり恐怖に引きつつているだろうか。

「目が見えなくなっただ後、それに慣れてくると、ぼんやり光るものが見えてくるんですよ。丸い、月のような。でもそれも、虫たちに食われていってしまう。そうすると怖くなって、やめてくれって叫ぶんです。そしてどこからか声が聞こえてくるんです。人を殺せて」

「じゃあ、君が高野さんを……」

「その声に素直に従うと、目が見えてくるんですよ。次に思うのは、血を浴びたい。血で喉を潤したいって。今だからそう思うだけで、当時は必死でした。もっといろんなことを思ったかもしれない」

「君は高野さんを、殺したのか？」

「さあ。だとしたら、どうなんです？ 証拠は、死体は？ 仮に捕まったとしても、俺は裁かれない。だって俺は、異常なんだから」

「……」  
恭次は立ち上がる。部屋を出ようとして、後ろから襲われる恐怖に駆られた。霧也は笑っている。「冗談ではないことは、恭次がよく分かっていた。それがムシツキの症状だと、知っているからだ。」

とにかく斑鳩に連絡しなければ。恭次は無様に、転がるように氷上家を出た。

恭次は先に聞いた、斑鳩の宿泊している民宿に駆けつけた。入れ違いに、口髭を生やした男と入れ替わる。何となくその黒服を振り返ったが、急いで斑鳩のもとへ向かう。

斑鳩は部屋中に書類を散らかし、壁には地図や関連図を貼り付けてあった。ちよつとした捜査本部のようだった。

斑鳩は部屋でもサングラスをかけており、突然来た恭次に慌てる様子もなく、

「どうしました？」

冷静な口ぶりに、恭次は平静を取り戻す。数回、深呼吸をする。

「高野瑞希を殺したのは、霧也くんでした。そしてムシツキも」

恭次は霧也の話した、ムシガミ憑きの症状を大まかに説明した。徐々に視力を失い、ついには失明する。その後、強い殺人衝動に駆られ、視力を取り戻す。人を殺すことで安定するらしい。

それを聞いても斑鳩は、取り立てて驚きもしなかった。

「そうするとこの町には、すでにムシガミ憑きが、三人以上は存在することになります」

「霧也くんだけじゃなく!？」

「ここ十年間の殺人と、霧也くんは無関係です。そして失踪の件数から、二つのタイプのムシガミ憑きが考えられる。死体を残すタイプと、死体を隠すタイプ。それに彼がムシガミ憑きなら、普段は普通の人と変わらない証明になる。個体差があるにしても、発作は抑制されているわけだ」

「他の連中も、普通の顔をして暮らしている、というわけですか？」

「まず失明の段階を通るわけだ。霧也くんがお姉さんを亡くしたシヨックで失明したのなら、高野瑞希を殺害するまでに一年以上の期間がある。高校受験もあり、早い段階に回復したのだろう。その間

に、他の誰かを殺しているかもしれないが、周囲に発作を気づか  
れていないことから、ムシガミ憑きの殺人衝動は、長い期間抑えら  
れるとも考えられる」

「死体を残すタイプが、年間二人だとしたら、失踪者の数から、複  
数のムシツキが？」

「おそらく、平戸や一家心中の件は、むしろ特別なのだろう。戦前  
の史料に目を通して、ムシガミ憑きによると思われる殺人は見ら  
れない。今が異常な事態なのか、潜在的に存在し続けてきたのか。  
ムシガミ憑きは、ここ十年で現れた精神疾患ともいえる」

「治療法はないんですか？」

恭次は切実だった。たとえ殺人鬼でも、それが奇病によるものな  
ら、弟だと思っっているから、救いたかった。もし病気なら、何かし  
らの治療法があるはずだ。

ただその治療法として今まで提示されたのは「処刑」であり、平  
戸の末路だった。

「霧也くんが失明した際、医者には？」

「行きました。なんの異常も見つからず、精神的なものと診断され  
たそうです」

斑鳩は口元に手を当て、

「そうすると、やはり奥月村の人間特有のものなのか？ もし独自  
の宗教観に根ざすものなら、そこに治療の糸口が……」

「なにかあるんですか！」

「もしもムシガミ憑きが、過去から存在したのなら、その祭祀の中  
に治療の糸口があるかもしれません。今までムシガミ憑きが現れな  
かったのは、それを抑える手段が存在していたからかもしれない」

現代の医療でも発見できない病気。その治療法を、祭の中に求め  
るのだから、正気の沙汰ではない。だが正気じゃないものを、さん  
さん見聞きしてきた。

「それはいつたい？」

「探すしかありません。ただ、心当たりはあります」

恭次は斑鳩を、これほどまでに力強く思ったことはなかった。

次の発作までの期間が分からない。恭次と斑鳩は、手分けすることになった。

恭次は来栖家を訪れる。来栖家の蔵には、斑鳩が見た文献よりも古いものがあるらしく、祭りに関するものが存在すると思われる。恭次が内容を理解しなくとも、蔵を開放することに意味があった。後日、斑鳩が確認しに行く。とうの斑鳩は、県の財団法人 史料を収集した団体を訪ねに行った。

恭次は斑鳩と同様、来栖家の立地に啞然とした。農地改革後の、旧地主と旧小作人の見分け方は、土蔵があるかどうかだ。地主は大量の収穫を保存する必要があり、その名残に土蔵を有していた。別宅ということだが、こちらに持つ農地を管理するためのものだろう。そう分かるのは、農同で働くうちに身についた感覚だった。

恭次を出迎えたのは、来栖家当主だった。斑鳩なら、そこに来栖老人の面影を見て取るだろう。

「たびたび失礼します。農同の葛城恭次です。今日は先日訪れた、斑鳩に頼まれてきました」

来栖は頑固そうな顔に、微かな笑みを浮かべて、

「父から聞きましたが、この町の歴史を調べているようですね」

「ええ。そこで蔵にある、他の文献を見せていただけないでしょうか？」

「あいにく、蔵は古いもので、開けられないんですよ」

「何か方法はないんですか？」

「扉が壊れているようでしたらね」

「修理すれば？」

「さあ。開くかどうか」

妙に来栖は乗り気じゃなかった。そんな古い蔵、どうでもいいのかもしいない。

「では、せめて蔵を拝見させていただけないでしょうか？」

実際に目で確認し、どう開かないのか調べ、対処する手段を講じたかった。

別に構わないだろう程度に言った恭次だが、来栖の顔はみるみる険しくなった。

「それはできません」

「なぜですか？ 拝見するだけです。もし開けられそうなら、こちらで何とか」

「あの蔵はどうあつても開かないんですよ。お引き取り願いたい」とりつく島もない。

「お願いします！ 見るだけでも」

「迷惑なんですよ。歴史研究だかなんだか知りませんが、あの蔵には、そんな大した物はない」

「どうしても、ムシガミ憑きに関する文献、来栖家の行っていた祭祀について、知らなければならぬんです！」

「よそ者が顔を突っ込むな！」

痛いところを突いたらしく、来栖は声を荒げる。

「あなたには関係がないでしょう。ムシガミ憑きなど迷信。老人どもの戯言だ」

「弟が、そのムシガミ憑きなんです！」

恭次の言葉に、来栖の顔は引きつった。

来栖は微かに唇を震わせ、

「何かの病気でしょう。そんな昔話に頼るより、医者に行ったらどうです？」

「弟は一度、失明しました」

来栖は黙る。

「そして今は目が見えています。声に従ったからだそうです。人を殺せと。その後、一人の少女が失踪しました。弟と、絵を描きに行つて」

来栖は猛然と立ち上がる。

「帰れ！ ムシガミ憑きなんてものはないんだ！ 仮にもしその話が本当なら、警察に行くべきだ。それに、ムシガミに憑かれた者は二度ともとは戻らない。殺すしかないんだ。その弟が人を殺す前に、自分でどうにかすることだ」

恭次は剣幕に気圧された。これ以上、何を言っても無駄だという思いもあつた。それに霧也の話を、不用意にしたのは失敗だった。

恭次は立ち上がり、

「失礼します……」

引き下がるしかなかった。

来栖家の門を出て、恭次が失意に沈んでいると、

「あの」

二十代半ばぐらいの青年が声をかけてくる。

「来栖の息子の、正人です」

父親には似ず、小顔の色男だった。

「どうも。失礼しました」

恭次が立ち去ろうとするのに、

「話があるんです。少しよろしいですか？」

「ええ、大丈夫です」

「場所をかえましょう」

そう言うや、正人は先を歩く。来栖家の門前から続く、長い石段を降り、駐車場にある休憩所に入った。

「すみません。あそこでは話しづらかったので」

「それで、お話とは？」

正人の顔に暗い影がよぎった。

「ムシガミ憑きについて、調べているとのことでしたが」

「ええ。蔵を拝見させていただきたかったのですが、追い返されてしまいました」

恭次は肩をすくめた。

正人はじつと恭次の目を見て、

「蔵には入れないんです」

「みたいですね」

「建て付けがどうかじゃないんです。あそこには、兄がいるんです」

「お兄さんが？」

「はい」

「どういうことでしょうか？」

恭次はこれほど、自分が鈍いとは思わなかった。まだ意味を理解していなかった。

「兄　直人は、ムシガミ憑きなんです」

「なんだって!?!」

思わず叫んだ。正人の困った顔に、恭次は口を押さえた。

「すみません」

「いえ。兄がムシガミ憑き、失明したのは十年と少し前です。それから妙なことを口走るようになりました。そして僕を、殺そうとしたんです……」

正人の肩が震えた。その光景が、まだ目に焼きついているかのようだった。

「父と祖父は、兄を蔵に閉じ込めました。二人は、何かの病気かと思っただけですが、迷信と信じていた、ムシガミ憑きを思い出ししました。最初の頃は、治ると思っていたんです。いや、信じたかったのです。二人は、兄に……」

正人は頭を抱え、くぐもった声で言う。

「“イケニエ”を捧げました……」

「いけ、にえ……?」

「はい。ムシガミ憑きは、人を殺さねば、狂い死にます。いや、もう狂っているのに。父と祖父は嫡子嫡流にこだわりました。今となつては馬鹿らしい。そのために、兄を生かすために、町の人を誘拐して、兄に与えました。毎年、十人前後を。僕がそれを知ったのは、

二年ほど前です」

恭次は怒りがわいた。来栖の家にしてもそうだが、正人が知って黙っていたことだ。しかしそれについて追求しても無駄だろう。一族に縛られていた、そう考えるのが妥当だ。

だから肝心のことを聞く。

「どうしてそれが、騒ぎにならなかったんですか？ それだけの人間が失踪して？」

「表面上は分からないかもしれませんが、奥月村の人間というだけで、忌避される風潮があります。それはムシガミ憑きの伝承によるものかもしれません。僕は来栖の人間だから、特別扱いを受けるにしても、よくは分からないのですが」

奥月の人間でも、来栖は特別なのだろう。名士的な存在だ。

「奥月村の人間がいなくなっても、ほとんどの人が気にかけないというよりも、関わるうとしません」

「それは、ムシガミ憑きの可能性があるからですか？」

「祟りがあるからです。ムシガミ憑きに関わると、ムシが憑くという」

「それは」

「分かりませんが、迷信と一笑はできません。現に、ムシガミ憑きは存在するのだから」

斑鳩は、特有の精神病だと言った。しかし現代の医療機関でも発見できない。そうするとこれは、奥月村の人間にかかった、呪いのように思えた。

「だから、蔵の中には入れません。しかしこうして、不審に思い、探っている方がいます。僕は警察に行きます。少なくとも、誘拐のことだけは信じてもらえるでしょう」

正人は立ち上がった。恭次はかけろべき言葉が見つからなかった。「あの時、そうしていればよかつたんだ……去年の春に……」

うなだれた背中を見送り、恭次は暗澹たる気持ちだった。ムシガミを祀る家系でさえ、治すことができずに、蔵の中に鬼を飼ってい

るのだから。

## Report / 11 「夜の来訪者」

斑鳩が戻って来るのが翌日。電話口で恭次は、簡略に来栖家でのことを話した。蔵には入れないこと、蔵の中にムシガミ憑きの来栖直人がいること。そして十年前に発症したことに、来栖が行方不明事件に関わっていることを話した。

斑鳩はさして冷静で、

「興味深いデータを見つけました」

その言葉に、一つの可能性を感じた。斑鳩なら何か、治療法を見つけたのかもしれない。

恭次は不安を抱きつつも、斑鳩を信じ、霧也が治ることだけを祈った。

寝静まった夜、秋の虫の、泣く声が聞こえる。そこへ、こつんこつんと、ガラス戸を打つ音がした。はじめは幻聴かと思ったが、それは間隔を置いて、定期的に繰り返す。何度目かに、恭次は起き上がった。明かりも点けていないのに、蛾が飛んでくるとも思えない。恭次は寝ぼけ眼で、カーテンを開けた。そして愕然とする。

一気に睡魔は去った。暗闇に慣れた目に、ガラス戸の向こうに立つ少年の顔が見えた。

深夜零時を回っていただろうか、微かな月明かりの下、氷上霧也がいた。霧也は恭次の姿を見て微笑む。

「こんな時間に」  
恭次はガラス戸の錠を外しかけ、ためらった。霧也はムシガミ憑きだ。

霧也は微かに見てとれる、微笑を浮かべながら、ガラス戸をノックする。その口が、「開けて」と動いたように見えた。

そこで恭次は思い直す。仮に霧也がムシガミ憑きだとして、恭次の方が体が大きい。簡単にどうにかできるものでもないだろう。

恭次は錠を外し、戸を開けた。

「どうしたんだい？ こんな時間に」

震えそうな声を必死に抑えた。霧也は平然とした様子で、

「葛城さんに、警告しておこうと思ってね」

「何をだい？」

「これ以上関わらない方がいいよ。この件には」

「ムシガミ憑きのことか？」

「へえ、そういうんだ」

霧也はずかずかと入り込んでくる。

「君は、治そうとは思わないのか？」

「べつに。どうでもいい」

「いつ発作を起こすのかも分からないのに？」

「分かりますよ。そうですね。だいたい今日みたいな、満月の夜です」

恭次はごくりと、喉を鳴らした。

「常に、平静な感じなのか？」

「発作を起こすと、変わります。ただ発作を起こす前、あるいは意識の根底にある、感情に従います」

「それは？」

「誰かを、深く憎む相手や、気に入らない人間を、殺したいと」

「コントロールできるのか？」

「さあ。ただ、いつ頃起こるのか、そろそろだということは分かりません」

「今は平気なのか？」

「そろそろですね」

恭次の体が強張る。たとえ義理の弟だとしても、それはもう、普通の人間とは別物だった。

「だから警告に来たんですよ。いろいろ嗅ぎ回っているみたいですが、目障りです」

「俺は君を助きたい！」

「俺はあなたを殺したい」

慄然とした。発作を起こしていない霧也に、明確に殺意を表明された。

「本当は、すぐに殺すつもりだった。ただ姉さんのために、あんたが仕事まで辞めて、こつちに住んだことを知ったから、許してやろうと思った。だけど今、あんたは俺の邪魔をしようとしている」

「俺はお前を助けただけだ！」

「頼んでない。それにどのみち、平戸みたいに狂って死ぬしかないんだろう？ 殺人をやめれば」

「今、別の方法を探している！」

「べつに、このままでいいんですよ。殺したい奴を殺す、その何が間違ってるんですか？」

「それは、当然だろう」

「法律で決まっているだけです。そしてその法律は、殺人犯を裁けない」

「平戸の、裁判のことを言ってるのか？」

「悪意の所在が不明確なら、どんな罪も許される。俺は病気だから、悪意は不在。俺は人を殺すことを許されている」

「その考え方も、病気の所為だ！ まず治すことを考える」

「だから治ったら困るんですよ」

暗闇の中で、霧也の目は爛々と輝いていた。その獰猛な輝きは、霧也の言うとおり、発作が近いのかもしれない。

「俺は奪われたように、この世界から奪う。それはそのムシガミ憑きとやらでなくとも、同じだったでしょう。殺したい奴が殺すなら、俺は殺したい奴を殺す。俺はこの病気を利用してにすぎない」

「もし晶子が聞いたら、きつと悲しむぞ！」

「テメエがその名前を口にすんじゃない！」

金切り声に近い叫び。恭次は霧也の憎悪を、はじめて感じ取り、思わず後ずさった。霧也は獣のように呼吸を荒げながら、

「これは警告だ。俺に殺されなくなかったら、さっさと町を出て行

くか、警察に突き出すんだな。俺を殺せれば、安心できるだろう？  
ただ俺は、次の発作には、あんたを殺すかもしれない」

霧也は肩をいからせ、恭次の横をすり抜ける。

「俺の復讐はまだ終わっていない。来栖の連中を殺すのは俺だ。邪魔をするなら、先にあんたを殺す」

なぜ霧也は来栖を憎むのか。それは正人の、去り際の言葉で察した。

「高野瑞希を誘拐したのは、来栖なのか？」

霧也は答えないが、一瞬立ち止まった仕草で分かった。瑞希を生贄とした、来栖家を憎んでいるのだ。復讐を果たす前に、恭次が真相を掴むのをおそれている。だがその復讐は、正人の告白によって叶わないだろう。恭次は口を閉じておくことにした。

ただもう一つ分からないのは、

「どうして俺を憎む？」

今度は立ち止まらなかった。夜の中に、華奢な絵描きの少年の影は消えていった。

目覚めは最悪だった。寝付きが悪かった所為もする。とりあえず職場に顔を出し、仕事回りに行こう。

朦朧とした目で、生活習慣どおり、洗面所へと向かい、顔を洗う。冷たい水を浴び、ぱっちり目目が冴えた。鏡に映る顔は、いつもとおり、寝不足の疲れた顔だ。

テレビを点け、ニュースを聞く傍ら、背広に着替える。何やら交通事故の報道をしていた。

「うちじゃないか」

月前町の、商店街に車が突っ込んだ話だった。職場で話題になるだろうと、途中で切る。朝の日差しを受けながら、車庫から出た。

そこで恭次は顔をしかめる。疲労の所為だろうか、右目が見つらい。視界の隅に、黒い点が、一つ二つとあった。飛蚊症というやつだろうか。強いストレスを受けた時、光がやたら眩しく見える時があった。晶子が死んだ時、霧也ほどではないが、目が見えづらくなり、車の運転に支障をきたしたことがあった。

今回も同様だろう。昨夜の件は、ひどいストレスだ。

恭次は職場で、交通事故が多発していることを聞いた。運転に注意を受け、仕事回りに行く。高野家に向かったのは、個人的な理由が強かった。来栖正人から聞いた話をしたかったが、まだ確実でないのでためらわれる。ただ知ってしまったからには、何となく顔を出しておきたかった。正人ははたして、自首したのだろうか。

恭次は右目の不具合に、顔をしかめながら、高野家の果樹園に着く。収穫に、老爺が出ているところだった。

「おはようございます」

車から降り、快活に挨拶する。

「今日はどのようなご用件で？」

と聞かれたら、「近くに寄つたので」と返すつもりだった。しかし老爺は、ビニールハウスの手前で、立ち尽くしているだけだった。怪訝に思った恭次は、近くによる。老爺は惚けたように、中空を見ていた。

「どうしました」

そこで恭次は、老爺が何やら、ぶつぶつ言っているのに気づく。

「……エナイ……ナイ……」

恭次は傍らで、耳をすました。

「クライ……ミエナイ……」

ぞつと、冷や汗が吹き出た。恭次は老爺の顔を見る。視線はあらぬ方を見て、ただその言葉を繰り返している。家族に知らせようと思った。高野家に向かうと、軒先で、念仏のようなものが聞こえてきた。

恭次は靴を履いたまま、軒に上がる。そして障子を開き、仏壇の前で横臥し、ぶつぶつとつぶやいている老婆がいた。彼女は奥月村の人間ではなかったはず。しかしどこかで血が流れていたのかもしれない。

恭次が呆然としてみると、獣の吠えるような、叫び声があった。まだ、息子夫婦がいる。恭次は廊下を踏み歩き、声の方へ向かう。そして廊下の先、居間に、血まみれの男が立っていた。その手には包丁が握られていた。男の足下には、血だまりに、真っ赤に染まった女性が倒れていた。

恭次は喉まで出かかった叫び声を抑える。

男はぶつぶつと、つぶやいていた。

「ヨルガクル……ツキガ……カクレル……」

男の、正気を失った目が、恭次を見た。男はうわごとのように繰り返しながら、歩み寄ってきた。恭次は駆けた。急いで高野家を飛び出し、車に乗り込む。ちょうど男が高野が出てきた。

恭次は急いで車を発進させた。不吉な予感がした。この町全体に、ムシガミの呪いがかかっているような。今朝の事故にしても、急に

失明した人々が起こしたのではないだろうか。

異常なことが起こっている。情報を求め、ラジオを点けると、のどかな音楽が流れているだけだった。

斑鳩も、町の異様な雰囲気気づいているようだ。

「救急車がひっきりなしに走ってましたよ。起きているのは交通事故故だけじゃないみたいですね」

恭次は仕事を放り投げ、斑鳩を呼び出した。斑鳩はすぐに応じた。喫茶店で落ち合うのが、ひどくのどかで、悪い冗談のようだった。右目はますます見づらくなっていた。

「警察に通報しましたが、向こうも慌てている様子でした」

高野家以外でも、同様のことが起きているらしい。ムシガミ憑きが、一気に発症した。今までの少ない数字から、そんなことがありえるのか疑問だった。そうすると、何か引き金になったのだろう。霧也の言った、「満月の夜」が引っかけだった。

斑鳩はこの状態でも冷静で、

「昨日、私が確認したところでは、これといった文献はありませんでした」

「そんな……」

治療が絶望的となれば、それは霧也や来栖直人だけでは済まない。この町全体が、存亡の危機に瀕している。

「しかし可能性が一つだけ」

「それは!？」

恭次は身を乗り出す。

斑鳩はもったいぶる様子もなく、

「すべての元凶ともいうべき、月波見神社です」

「ツキハミ?」

「ムシガミを祀っていた神社です。来栖家が手放してしまいました。が、奥月村に廃墟が残っています」

「確かに元凶である、ムシガミを祀っていますが、来栖家でさえ、

ムシガミ憑きを治せない。そんなところに治療法があるでしょうか」「あくまで可能性の一つです。私が見た古文獻では、月波見神社は、ある洞窟を封印するように建てられています。もしかしたらその奥に、謎を解く手がかりがあるかもしれませぬ」

「いつたいどんな？」

「分かりませぬ」

お互いに、藁にもすがる思いだった。そこに可能性があるとしたら、行くしかない。

「霧也くんのが気がかりですが……」

なおも洩る恭次に、

「もし発作を起こしたのなら手遅れです。どうすることもできない。殺すか、殺されるしかありません」

それに反論することはできなかつた。

恭次の運転で、二人は町外れの、旧奥月村に向かう。道中、斑鳩が調べた情報を教えてくれる。

「今は途絶えてしまったようですが、古くは“虫送り”という儀式が、月波見神社で行われていました。それがどのような儀式かは分かりませんが、可能性を見出すなら、それでしよう」

「でもやり方が？」

「それを再現するためにも、月波見神社に向かうんです。封印された洞窟は禁足地。神官や村人が忌み嫌う領域です。もし虫送りに使われたのなら、痕跡を留めているかもしれませぬ」

「藁にもすがる、ってやつですか」

「まあ、そういうことです」

そうして奥月村跡につく。車での進入が困難なので、ここからは徒歩だった。

村というが、ござっぱりして、廃屋がほとんどなかった。かなりの過疎だった。

「二、三軒ぐらいしかないですね」

「ゴルフ場の建設で、整理したらしいです。ここに宿泊施設をつくる計画でした」

「最近なんですか？ あまり進行しているようには見えませんが」

「十年前です。そしてその工事で、月波見神社を解体したそうです」  
「それって……」

「月波見神社は、来栖家が所有する山にあります。神社を解体していこう、作業員の事故死や、建設機械の原因不明の故障などで、計画は見送られました」

「……」

あまりにも非科学的だが、ここまでくると信じざるをえない。

「ようは祟りです。その年から、ムシガミ憑きは現れた。真っ先に、来栖家の跡継ぎに」

だとするのなら、すべての解決の糸口は、月波見神社の、その奥にあるのかもしれない。まだ見ぬ暗黒の洞から、冷たい風が吹いてくるような錯覚を覚えた。

## Report 14 「ツキハミ虫」

斑鳩の準備はよかった。懐中電灯と、ポラロイドカメラを持ってきていた。

「ここが、ツキハミの洞です」

倒壊し、腐食した瓦礫の山の傍らに、巨大な洞穴があった。

恭次は息を呑む。昼でもなお暗い、暗闇の洞窟。微かに、冷たい風が吹いていた。

「地図の写しでは、そう深くない。地下にもぐるか分からないが、この奥に祭壇があるようだ」

斑鳩は古びた地図のコピーを広げながら言う。洞穴は、途中で分岐するようだが、間違った通路には×印がついている。

「行きましよう」

斑鳩は、ライトを点けた。闇を切り裂くも、なお先は見えない。暗闇にあつて一筋の光は、ムシガミ憑きの人間の見る世界のように、頼もしくもあり、今にも消えそうな心細さがあった。

二人の足音は、洞穴に反響する。恭次は闇の奥に、得体のしれない何か潜んでいるような、恐ろしさを感じた。気を紛らわすため、斑鳩に話しかける。

「この洞穴には、どんな曰くがあるんですか？」

「単純には、鬼虫がここに封印されていたことになる。来栖家の祖先が封印し、月波見神社を建てたのだろう。それもかなり古く。月波見とは、“ツキ”を“ハム”、月を虫食むという意味だ。月が何を示すのか分からないが、それが鬼虫の性格だとしたら、“ツキハミ虫”とでも呼ぼうか」

「封印していたのなら、ムシガミ憑きはなぜ起きるのですか？」

「鬼虫の呪い、と考えるべきか。奥月と月前の関係は、奥月がこのツキハミの洞を封印し、月前はその恩恵を受けていたのだろう。そ

の上下関係が逆転したのが江戸時代。月前の人間も、たどれば奥月。近親婚を繰り返していた奥月ほど、呪いの影響を受けやすかっただけかもしれない」

「斑鳩さんは、呪いだと思っっているんですか？」

「まさか。可能性の一つです。私はすべての可能性を試さないと、納得できないんですよ。仮に、信頼できるデータが別にあっても、呪いの可能性を完全に否定しないと、気が済まない性分なんです」

「私は、呪いがある気がしてきましたよ」

「その可能性は捨てきれませんか」

「いえ。私の両親は、別の県から引越してきたんです。だから私には、奥月の血が流れていません」

「それが、どうかしましたか？」

「実は、右目が見えないんですよ。霧也くんの話と同じように、黒い斑点が、虫食いのように現れて、奥月村に向かうほど、ひどくなりました。ここに入った頃には、もう見えなくなりました」

「……」

「正人さんが言ったように、ムシガミ憑きに関わった祟りなんですよ」

まだ左目は見えている。高野のように発作を起こすこともない。

霧也のような、潜伏期間なのかもしれないが。

「急ぎましょう」

斑鳩は言葉少なに言った。

いくつかの分岐路をぬけて、大きな広場に出た。腐食した鳥居をくぐる。ある程度の湿度と温度が確保されれば、木は腐らない。いつの時代のものか分からないが、依然としてそこにあった。

そしてどこから光が差し込んでいるのか、地底湖が映し出される。澄んだ水面の下には、藻類さえもない。

「ここが、儀式の場です」

期待したような、虫送りに関する痕跡は、何も見つからなかった。

「ここに、鬼虫は封印されていたわけですか」

「それが実体を持ったものかは分かりません。光鐘寺縁起では、清賢和尚に退治されたことになっていますが。ただ、人の心を惑わす鬼だとしたら、実体よりも、精神的なものと考えるべきでしょう。」

“鬼”本来の原義に近い。鬼とは、隠れた存在であり、アニミズムの神と同義。精霊のようなものです」

「ウエンディゴですか」

「鬼虫とは、そういうった存在かもしれない。精神の疾患なら、祭りという精神的な要素で、取り除くことができましたでしょう。しかし今、私たちの目の前にあるのは、具体的な脅威」

「斑鳩さんは、呪いじゃないというんですか？」

「はい」

「ここまでできて？」

「だからこそです。あなたが発症して確信した」

「どういふことですか？」

「ここを出ましよう。ここにいる必要はない」

斑鳩は足早に立ち去る。それを恭次は釈然としないまま追いかけた。

車の運転は斑鳩だった。恭次は右目が見えないだけで、他に異常はない。ただ気分のいいものではなかった。

「結局、解決の糸口は見つかりませんでしたね」

「可能性の一つが消せました」

「呪いの可能性ですか？」

「ええ」

「それがよく分からないんですよ」

「あなたが失明したこと、そして虫送りが精神的な要因に依存すること。それで分かりました」

恭次は怪訝そうに、残った左目で見る。

斑鳩は昂ぶった様子もなく、相変わらずの冷静。

「呪いであればまだよかった。最悪の可能性が、証明されました」

「なんだっていうんですか？」

町が見えてきた。日暮れの町に、黒煙がたなびいている。

「いつたいなにが!？」

斑鳩は答えず、誰にもなくつぶやく。

「はじまったようだ」

町の中には自衛隊の車両があふれていた。護送車のようなものが、町民をのせている。

ムシガミ憑きの被害は、ここまで拡大したのか。

恭次は啞然としていた。

そのうちに、防護マスクをつけた隊員が、斑鳩の車を呼び止める。

「避難命令が出ています。こちらで誘導するので」

「佐藤氏は、どちらにいます？」

マスク越しで分からないが、隊員はきよとんとしたあと、

「斑鳩先生ですね。隊長は公民館にいます」

「ありがとうございます」

斑鳩は精神が図太いのか、まったく動じた様子もなかった。

「今、避難命令がどうとか……」

「そういう体裁をとったんでしょう」

「危険な化学物質とか、ばらまかれたんじゃ？」

「化学物質は、すでにばらまかれていたんですよ」

「えっ？」

「この町で農薬が使用され始めたのは40年前。その頃から土壤は汚染され、蓄積された重金属を作物が吸い上げ、食した人間の中に堆積されていきました。ただ毒性を發揮しだしたのは、十年前と、最近だと思われまます」

「なんの話をしているんですか？」

「水銀は、それ自体では消化器系での吸収が悪く、毒性を發揮するのに時間がかかります。危険だとされるのは化合物です。水銀化合物の中には、即死性のももあります。この地域で使用された農薬が、土壌で化学変化し、毒性を持つ物質が現れたのでしょ」

「それがなんだっていんです？」

「そうして蓄積された個体には、中毒症状が現れます」

「どんな？」

「目が見えなくなる、とか」

恭次は自分の右目に触れた。真っ暗で、何も見えない。それが化学汚染だと、今さら言われても信じられない。

「じゃあ異常な行動は？ 中毒で片付けるつもりですか？」

「はい」

「視力が回復するのは？」

「中毒の原因である、重金属の体外排出でしょう」

急にそんなことを言われても、高野家で見たことや、霧也の様子、来栖正人を思えば、そう簡単に割り切れなかった。

公民館前に、軍用ヘリが四台とまっていた。その近くに仮設テントが設置されており、忙しく人が行き交っていた。斑鳩と恭次は車を降り、そこへ向かう。作戦本部といった様相だった。

迷彩服姿の男達の中に、見覚えのある人物がいるのに、恭次は気づいた。

「佐藤氏」

斑鳩が呼びかける。それに口髭を生やした長身の男が、

「おや、斑鳩先生」

互いに歩み寄る。佐藤は恭次を一瞥したが、すぐに斑鳩を向く。

「佐藤氏、時期尚早ではないですか？ まだ他の可能性を捨て切れていません」

「その通りです。しかし我々は、事態が最悪の方向へ進んでいると判断。これ以上被害が拡大しないよう、住民を避難、隔離することにしました」

「隔離？」

恭次が頓狂な声をあげた。じろりと佐藤が見る。斑鳩は構わず、

「では田畑を焼却しているのは？」

「大規模な土壌改造を、同時に進行しています。その一環です」

「政府が進めた農業政策の誤り、その犠牲者、すべてを隠蔽するつもりですか？」

佐藤は目を細めた。

「これで、依頼は終了です。原因が土壌汚染でしたから、先生も検診を受けてください」

「どうやら私を雇ったのは、時間と金の無駄でしたね」

「そんなことはありません。先生のレポートは、真実の一面をついています。ムシツキなる精神病は存在します。今回の土壌汚染は、その引き金になったにすぎません」

「じゃあ、これで解決ということですね」

「そうなります」

佐藤は斑鳩と恭次を、へりに案内する。

「この区域から待避することをおすすめします」

「素直に従いましょう」

恭次は釈然としないが、乗り込む。佐藤や物々しい空気に気圧された。

斑鳩は乗りかけ、

「結局、あなたは何者なんですか？」

「陸上自衛隊中央情報隊のエージェント、とでも名乗ればいいですか？」

「いえ、大丈夫です。あらかた分かりました」

爆音をあげ、へりは町の上空に飛ぶ。夕暮れの町からは、黒い霧がまばらに、立ち上っていた。

## Last Report

恭次は病室に隔離されていた。

「何もここまで嚴重にする必要はないんですがね」

向かい合って座る、斑鳩が苦笑した。

「どうです？ 右目の具合は？」

「ええ。うつすらと、見えるようになってきました」

「残留していた重金属が、徐々に排出されているようですね」

「こうしてみると、確かに汚染が原因だったんでしょうね」

「いえ、そうともいえません」

恭次は怪訝そうな顔をした。

斑鳩は得意げに、

「葛城さんはムシガミ憑きの発作を目の当たりにしましたね？」

「ええ、まあ」

「ではもし自分が、両目とも失明した場合、あんなふうになると思えますか？」

「いやあ、取り乱すかもしれません、人を殺そうとはしません」

「つまり、そういうことですよ。葛城さんは外から来た。発症まで個人差はありますが、農薬を扱う仕事と身近だった所為か、葛城さんは三年で発症した。思い出して欲しいのは、ヨルガクルという言葉です。これは失明していく過程を意味しているのかもしれませんがヤミガキタは完全に失明した状態」

「失明し始めた時点で、発作を起こすと？」

「まあ推測ですが。葛城さんは、右目を失明しても、いたって平静でしたね」

「内心はかなり怯えてましたよ。このままどうにかなっちゃうんじゃないかって」

「月前町の人たちは、ムシガミ憑きの伝承を、何らかのかたちで聞かされているわけです。その伝承と同じような状況に置かれ、それ

をムシガミ憑きと勘違いする」

「集団催眠みたいなものですか？」

「そうですね。自己暗示みたいなものでしょう。来栖直人は完全に失明した状態で保護されました。自衛隊が住民を避難させる際、十数名のムシガミ憑きと交戦しています。失明や、黒斑の症状が出ている人も、二百人近くが保護されました」

そこで、霧也のことを思い出す。

「そういえば霧也くんは？」

「保護されましたが、施設を脱けだしたそうです」

「そうですか」

無事であることに安心したが、複雑な心境だった。はたして霧也は、本当に人を殺したことがあるのか。そして恭次のように、体の中の毒は排出されるのか。

「霧也くんも、中毒症状だったのでしょうか？」

「そこが私も疑問です。彼は失明から立ち直ったのに、発作を繰り返していた。彼の証言は、ムシガミ憑き唯一の証言です」

「やはり自己暗示なのでしょうか？」

「それで片付けることもできませんが、もしそうなら、毒がぬけても殺人を続けるかもしれない」

それを聞いて恭次はぞつとした。来栖一族が塀の中にいる間、狙われるのは、自分なのかもしれない。あの夜の、霧也の顔を思い出した。

「少なくともムシガミ憑きは、月前町の人間の、精神的要因にあるのでしょうか。殺人衝動にしても、近親婚を繰り返したことによる、何らかの変異かもしれません」

「ウエンディゴ、みたいなものですか」

「だとしたら、悪霊の仕業になりますよ」

斑鳩はそう笑った。

## L a s t R e p o r t (後書き)

なんか全然ホラーでも、なんでもなかった。

テーマは環境汚染、レイチエル・カーソンの「沈黙の春」を読んで、思いついた。

なんか言うことないです。読んでくれた方々、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9672w/>

---

ツキ八三虫

2011年10月1日03時10分発行